

大学レベルにおける音声教育

—新しい可能性の追求—

川崎医療短期大学 英語教室

長瀬慶来・名木田恵理子

(昭和54年10月5日受理)

Teaching how to speak and understand English at College

—In Quest of a New Method—

Yoshiki NAGASE and Eriko NAGITA

Department of English, Kawasaki Paramedical College

Kurashiki 701-01, Japan

(Received on October 5, 1978)

概 要

伝統的には、外国語学習における音声面での指導は、早ければ早いほどよく、大学においては、もはや遅すぎるといわれている。しかしながら、たとえ、無意識に外国語の音韻体系を習得できる時機は過ぎていても、逆に、それを補う知能・教養が発達しており、それを利用した新しい教授法が考えられる。即ち、既に習得済みの母国語との対照・比較を理論的に行ない、その違いに基づいて意識的に外国語の音韻体系を習得させる方法である。この方法を我々は、対照音声学教授法とよび、その具体的な展開を提示する。

Résumé

Traditionally it is said that the earlier is the better and too late at College in the teaching of pronunciation and aural comprehension of a foreign language. It is true, but even if it is beyond the time limit of unconscious acquisition of the phonological system, the learners at College level have pretty high education compensating it. We decided to work out a new method taking this advantage. That is, the phonological system of a foreign language can be taught consciously and systematically by carrying out the theoretical comparison of learner's mother tongue with the target foreign language with the help of contrastive linguistics and phonetics. We call this Contrastive-Phonetic Method and present a concrete teaching plan consisting of seven target steps.

I. 「聞く・話す」ことの指導

—正確な発音・正確な聞きとり

言葉においては、話し言葉こそが第一次的なものであり、書き言葉は二次的なものにすぎな

い。言語活動とは、言葉の意味と音声とを結びつけることである。この話し言葉としての英語は、また、現代の学生が英語教育において求めているものの一つである。

ところで、その際最も重要なことは、発音及び聞きとりの正確さであるといえよう。正確に発音し、また聞きとれないでは、「会話」など夢物語である。もちろん、この発音及び聞きとりについては、年齢は低いほど習得が速く、遅くとも中学校の英語教育の段階で徹底的に指導されるべきものである。しかしながら、現実には、中学・高校では、読み書き中心の学習で、発音及び聞きとりの指導を受けた学生はほとんどいない。そこで、遅きに失したとはいえ、「聞く・話す」ことの指導において、英語音の正確な発音及び聞きとりという基礎造りから始めることが必要となってくる。

II. 大学レベルにおける音声指導

——新教授法の展開

§1. 日本語音から英語音へ

大学レベルにおける「聞く・話す」ことの指導においては、まず次の2点を考慮に入れておかねばならない。即ち、①学習者にとって、既に日本語が第一言語として習得され、形成されてしまっていること、②学習者は教育を受けた成人で、ある程度の教養を備えていること、である。このような学習者の条件から考えて、小・中学生に対するような指導法は、適用がむずかしく、学習者に合わせた独自の教授法が必要とされる。

つまり、まず①の点から、学習者は、発音器官の動きが日本語用に限定され、日本語以外の言語音体系に対しては、おしに近い状態であるということ、また、聞く方についても、耳による認知が日本語音以外の言語音には行なわれず、つんぽに近い状態であること、が前提となる。従って、母国語習得の際に行なわれるような Model Speech の無意識のうちの模倣による習得は、もはや不可能となっているわけである。このような学生に、英語の発音及び聞きとりを指導するには、まず、日本語の音体系との比較を行ない、その有意差のある点のみを強調することから始めなければならない。

次に②の点から、学習者はある程度の教養を備えているわけであるから、彼らの理解力に働きかけるような方法が有効かと思われる。単なる模倣練習ばかりでは興味を失うのは明らかであろう。

上記の点をふまえて、我々は、次に述べるような教授法を選択した。

§2. Contrastive Phonetic Method の導入

既に述べたように、教授対象者の2条件——日本語の音声体系が完成していて、教養を有する——から、教授法には次の2点を取り入れたものが適当と思われる。即ち、①日本語との対照・比較によって英語音をとらえさせる、②音声に関する説明を与えて、理論的にわからせる、と

いうことである。この2点から我々は、対照言語学及び Phonetic Method の理論をとり入れることが有効であると考ええる。

対照言語学とは、その名の示すとおり、二言語の対照において、その言語の姿をより鮮明に浮かびあがらせるというものである。また、Phonetic Method とは、外国語の音声を単なる模倣を通して習得させるのではなく、音声学の知識を導入して科学的・組織的に訓練させるという方法である。

我々は、これらの理論をとり入れ、更に改良して Contrastive Phonetic Method として採用することにした。Contrastive Phonetic Method とは、基本的には Oral Approach による mim-mem (模倣記憶練習) とか、pattern practice (文型練習) の技法を用いながら、それによる単調さを補うために、音声学知識による科学的・組織的説明と、対照言語学に基づく日英両語音の音体系の比較とを加えた教授法である。この方法では、Oral Approach 一辺倒からくるロスは減少し、より能率的・体系的な学習が可能であるとともに、学習者の知的欲求が満たされ、学習意欲が増すことが期待される。我々は、この、伝統的 Phonetic Method の理念に、日英対照言語学の成果と、Oral Approach の手段をくみ入れた三位一体の教授法が、大学レベルの学生に、限られた時間で「聞く・話す」ことを指導する場合、最も適したものだと思われる。

Ⅲ. 発音及び聞きとりの実際的指導

§ 2 で述べた Contrastive Phonetic Method は、実際には、発音及び聞きとりの指導にどのように適用されるべきであろうか、具体的な指導法を展開してみる。

まず発音の面では、

i) Introduction

学生に例文を読ませ、その診断をカルテに記入する。

ii) 理論的導入

- ① 日本語の音体系との違いを述べ、個々の音について発音の時発音器官がどのように動いているかを説明する。
- ② 同時に、それに対応する日本語音はどうかということも補足する。
- ③ 更に、同化現象やリズム・イントネーションなどについて、音声法則についての説明を加えながら理解させる。

iii) 練習

- ① これらの知識を得させた上で、カルテをもとに各人の発音矯正を行なう。
- ② pattern practice 及び mim-mem の方法で練習させる。(短時間に限定)

iv) 発展

教材を単音・単語・単文単位の練習によるものから、場面を与えた対話練習へと広げる。

聞きとりにおいても、同様にして行なう。

i) Introduction

学生にnative speaker による例文を聞かせ、dictation させて聞きとり能力の診断を行なう。

ii) 理論的導入

① 日本語音と英語音との比較、また、英語音どおしの比較を理論的に行なうことによって、聞こえの差を理解させる。

② 様々な音声法則について説明し、英語音が文の中でどのように変化するか教える。

iii) 練習

① これらの知識と照らしあわせながら、診断の結果をもとに各人の hearing の弱点を補強する。

② 繰り返し、聞きとりテストを行なう。

iv) 発展

教材を単音・単語・単文単位の聞きとり練習によるものから、場面を与えた対話の聞きとりへと拡張する。

以上は、発音及び聞きとりの指導における具体的な方法であるが、次に個々の指導項目をあげてみる。

<分節音素 (segmental phonemes) の指導>

a) 個々の音の指導

1. 母音

◦ 日本語音との比較対照

「ア」 - /æ/ /ɒ/ /ə/ /ʌ/ /ɑ:/ /ɔ:/ /aɪ/ /aʊ/

「イ」 - /ɪ/ /i:/ /iə/

「ウ」 - /ʊ/ /u:/ /uə/

「エ」 - /e/ /ɛ/ /æ/ /eə/ /eɪ/

「オ」 - /ɔ:/ /ou/ /ɔə/ /ɔɪ/ /ɒ/ /ʌ/

◦ 英音どおしの比較

/ɒ/ - /ʌ/ - /æ/, /ɑ:/ - /ɔ:/, /aɪ/ - /aʊ/

/ɪ/ - /i:/

/ʊ/ - /u:/, /u:/ - /ɔ:/, /uə/ - /ɔə/

/e/ - /ɛ/, /æ/ - /e/, /eɪ/ - /æ/ - /eə/

/ɔ:/ - /ou/, /ɔə/ - /ɔɪ/

2. 子音

◦ 日本語音とそれに対応する英語音間の比較

「フ」 - /f/ /h/ /hw/

「ブ」 - /b/ /v/

「ス」「シ」 - /θ/ /s/ /ʃ/

「ズ」「ジュ」 - /ð/ /z/ /dz/ /dr/ /dʒ/ /ʒ/

「ツ」「チュ」 - /ts/ /tʃ/ /tr/

「グ」 - /g/ /ŋ/

「ル」 - /r/ /l/

「ン」 - /m/ /n/ /ŋ/

◦ 有声・無声の対立

/p/ /t/ /k/ - /b/ /d/ /g/

/f/ /θ/ /s/ /ʃ/ - /v/ /ð/ /z/ /ʒ/

補) 子音の異音的変種

1. 氣息音の有無 [p^h] - [p]

2. 破裂の有無 [p] - [p̚]

b) 子音連鎖

C₀³ V C₀⁴

子音連鎖は語頭で3つまで、語尾で4つまで可能である。その指導の際には、CVを基本単位とする日本語の影響をうけて子音内に母音を介入させないように注意させる。

ex. strengths (CCCVCCCCの例)

/streŋkθs/

<超分節音素 (super-segmental phonemes) の指導>

a) ストレス

1. 語強勢
2. 句強勢
3. 文強勢

b) リズム

1. 日本語とのリズムの相違を教える。

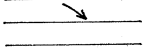
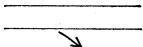
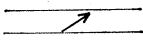

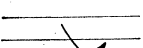
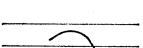
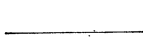
日本語 = syllable-timed language

英語 = stress-timed language

2. 弱強 (Iambus), 強弱 (Trochee), 強強の3種類の英語の基本リズムを教える。

c) イントネーション

7つの基本パターンとその組み合わせの習得及び認知。

- | | |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| 1. high-fall |  |
| 2. low-fall |  |
| 3. high-rise |  |
| 4. low-rise |  |
| 5. fall-rise |  |
| 6. rise-fall |  |
| 7. mid-level |  |

d) Connected Speech 内における音素の変化

1. 同化 (Assimilation)
 - i) 逆行同化
 - ii) 進行同化
 - iii) 相互同化
2. 脱落 (Elision)
3. 弱化 (Reduction)
4. リエゾン (Liaison)

IV. 教室指導から L. L. へ

Ⅲで述べた「聞く・話す」ことの実際の指導を、次の3段階に分けて行なう。即ち、① Pre-labo 段階：一般教室で行なえる理論的導入部分 ② L. L. における訓練 ③ Post-labo 教育：学生同志の対話、教師或いは native speaker を相手とする対話練習 の3段階である。更にこれを、具体的に7 steps に分け、我々が、教授の goal として目指すところを示し、この論の締めくくりとしたい。

「聞く・話す」ことの指導の7 steps

- Step 1.** 黒板を用いた音声面の理論的説明
- Step 2.** L. L. control room での man-to-man の interview によるカルテの作成
- Step 3.** L. L. を使った実際の訓練
- Step 4.** 評価

hearing については、小 quiz を課す。

speaking については、カルテと照らしあわせて進歩の度を測る。

Step 5. 場面設定による学生間及び学生对教師の実際の会話。

Step 6. native speaker との対話及び、英語放送、映画、劇などへの受動的参加。

Step 7. speech contest, 英語劇などへの能動的な参加。

以上、大学レベルにおける一般教養科目としての英語教育の可能性を、当大学及び短大の現状を考慮に入れながら、「聞く・話す」ことの指導面から述べてみた。我々は、ここに提示した方法が、現段階では、大学レベルにおける「聞く・話す」指導の最も有効なる手段と信じるが、むろん、各大学ごとに、学生のレベル、カリキュラム、施設等の制約により、達成される step も限定されるであろう。当大学及び短大での実践においては、現在のところ、step 5 まで到達するのが最高限度である。カリキュラムの面、人材 (native speaker) 等の面での大学側の配慮が望まれる次第である。